

そこで実際に健康成人例、乳頭形成術後例、胆汁流出障害例の3例に本法を実施し、関心領域をそれぞれ総胆管、総胆管末端部、十二指腸の3個所に設定し、Time-Activity Curve を得、これを検討した結果、卵黄製剤負荷後、総胆管末端部の T/A curve は健常例では律動的周期的波型を示し、乳頭形成術後例では、十二指腸の運動に連動した波型を示し、胆汁流出障害例では不規則な波型を示しつつ逆にカウント数が上昇して行く結果を得た。

以上3例の T/A curve の検討結果、Pinhole Collimator 装着胆道シンチグラフィーにおける胆道末端部の関心領域における T/A curve は Oddi 筋の収縮弛緩に伴う胆管内圧の変化をある程度表現するものであると考えられ、本法により、対外的な間接的胆管内圧測定が可能であると考えられた。

47. シンチビューを使用した2核種同時投与による肝・胆道・消化管シンチグラム

上芝 教昭	(那賀・RI)
前田 明文	(同・内)
鳥住 和民	(和歌山医大・放)
青木 洋三	(同・消外)
岡田多加志	(和歌山済生会・RI)

[目的]

シンチビューを使用した^{99m}Tc-PI ¹¹¹In-DTPA の同時使用による肝胆道・消化管シンチグラフィーを行い、胆汁排泄動態ならびに消化吸収機能を推察する上で、良好な成績を得たので報告する。

[基礎的検討]

1. コリメータの選択 2. window 幅, 使用エネルギーの設定 3. 投与量の設定

[臨床応用]

本法によれば胆汁の分泌排泄動態ならびに食物と胆汁の混和 (mixing) が生理的に行われていることが、直視的に観察することができ、また ROI を設定して time activity curve を作成することによって、種々の病態時に出現する消化吸収障害の原因の究明に役立ち得るものとする。

[結語]

シンチビューを使用した2核種同時投与の肝胆道・消化管シンチグラム解析について、基礎的検討を行ったところ、①Medium energy parallel collimator を使用し

②Window 幅を^{99m}Tc に対し140 KeV の5%、¹¹¹In に対し247KeV の20%に設定し、③患者への投与量を^{99m}Tc-PI 2 mCi, ¹¹¹In-DTPA 150 μ Ci とする、などにより極めて良好な成績を得た。

48. 肝疾患における経直腸門脈シャント率と門脈径(電子スキャン測定)との関連性について

塩見 進	栗岡 成人	箕輪 孝美
黒木 哲夫	門奈 丈之	(大阪市大・3内)
越智 宏暢	浜田 国雄	池田 穂積
大村 昌弘	小野山靖人	(同・放)

演者らは経直腸門脈シンチグラフィーの臨床的意義について検討を加えてきた。今回は経直腸門脈シャント率と超音波断層にて測定した門脈径との関連性を対比検討した。検査法は従来通りに施行し、肝、心部の放射活性より経直腸門脈シャント率(S.I.)を算出した。門脈径はリニア型電子スキャンを用いて、脾静脈、上腸間膜静脈の合流部にて測定した。

成績) ①慢性肝疾患における S.I.: 慢性肝炎の S.I. は $8 \pm 5\%$ (n=33)、肝硬変症では $42 \pm 29\%$ (n=49) であった。特に上部消化管静脈瘤を有する27例は $62 \pm 19\%$ の高値を示した。②門脈径と S.I.: 慢性肝疾患35例について門脈径を測定し対比した。門脈径は12 mm 以下、13~15 mm、16 mm 以上の3段階に区分した。門脈径12 mm 以下では17例中15例(88%)で S.I. 正常域を示したのに対し、16 mm 以上では全例が S.I. 高度異常を示した。しかし門脈径13~15 mm の中等度拡張群では、13例中4例において S.I. が正常であり、少数例ながら両者の不一致がみられた。今後、門脈循環動態の測定に関しては、形態、機能の両面から検討していきたい。

49. ⁶⁷Ga による原発性肝癌の診断

長谷川義尚	橋詰 輝己	井深啓次郎
中野 俊一		(成せ・RI)

原発性肝癌症例における⁶⁷Ga 及び^{99m}Tc-コロイドによるサブトラクションシンチグラムの意義を検討した。コンピューターは HITAC10 II/L を使用した。原発性肝癌46例及びそれを疑って検査を行ったが肝の限局性病変を除外し得た26例の合計72例である。原発性肝癌46

例のうちコロイドシンチ陽性42例(91%), 疑陽性6例(13%), ^{67}Ga シンチ陽性34例(74%), 疑陽性9例(20%), サブトラクションシンチ陽性43例(94%), 疑陽性1例(2%)であった。一方肝の限局性病変を有さない26例ではコロイドシンチ陽性5例(19%), 疑陽性9例(35%), ^{67}Ga シンチ陽性0例, 疑陽性3例(12%), サブトラクションシンチ陽性1例(4%), 疑陽性4例(15%)であった。

false positive false negative 及び accuracy はコロイドシンチではそれぞれ53%, 9%及び76%で, サブトラクションシンチでは19%, 4%及び90%であった。

原発性肝癌症例のうち肝及び ^{67}Ga シンチの両者が陰性所見を呈し, かつサブトラクションシンチで陽性像を得る事の出来た症例を2例経験している。

サブトラクションシンチグラフィは, ^{67}Ga シンチ及び $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -コロイドシンチの両者を各々単独あるいは併用して用いる以上に原発性肝癌の診断の精度をたしかめる事が出来ると考える。

50. Ectopic Gastric Mucosa of the Esophagus の1例

大西 隆二 鍋嶋 康司 榎林 勇
西山 章次 (神大・放)
松尾 導昌 大槻 修平 (西宮・放)
吉本信次郎 (高知医大・放)

胃粘膜が, 胃以外の消化管にみられることは, 広く知られることであり, 又, 食道への異所性胃粘膜については, 本邦でも, 木暮らの報告, 等があるが, 稀である。

最近, 我々は, $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ によるシンチグラフィにて集積像をみた, 先天性と思われる食道の異所性胃粘膜の症例を経験したので, 報告を行った。

症例は, 57歳男性で, 自覚症状はなく, 胃の集団検診にて, check され, 精査のため受診している。

胃カメラにて, 食道の異所性胃粘膜を指摘され, 門歯列より約20cmの後壁側に, 発赤を伴った病変として認められた。

病変部の生検像では, 扁平上皮下に, parietal cell 並びに, chief cell からなる胃粘膜がみられた。

$^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ によるシンチグラフィでは, 静注60分後に最も強く, 病変部に一致して, 明瞭な hot region をみとめ, その特異性も考えると, 非常に有用であった。

先天性の食道の異所性胃粘膜は稀であるが, 比較的多

い. Barret esophagus に代表される後天性の下部食道の円柱上皮についても, $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ によるシンチグラフィは有用であり, Meckel's diverticulum の診断のみでなく, このような症例にも, 使用されるべきと思われた。

51. 甲状腺疾患によるシンチグラムと超音波像について

関本 寔 白川 恵俊 岡橋 進
間島 行春 赤木 弘昭 (大阪医大・放)

甲状腺シンチグラフィによる診断に, 電算機化超音波像を併用した。

電算機は EMIS005/12 型の IVC 用, Eclipse, S/200 型を利用し, 2枚のインターフェイスを介して超音波装置に接続した。

甲状腺超音波像はビニール製ウォーターバックを装備した電動メカニカルスキャンニング装置にて, 水浸法で施行した。

この方法により甲状腺像の横断層像, 矢状断層像, 前額断層像を得た。

前額断層像ではシンチグラフィと類似した画像として, 甲状腺の正面像が描画され, シンチグラフィとの比較が容易であった。

〔結 語〕

1) ^{131}I によるシンチグラフィにて甲状腺の形態が不明瞭な疾患に, 電算機化超音波像を併用すれば, 甲状腺の形態がより明瞭となった。

2) 慢性甲状腺炎ではシンチグラフィと超音波像とも種々の形態を認めた。

3) 結節性甲状腺腫に ^{201}Tl によるシンチグラフィと超音波像を加えることにより, 腫瘍病変の鑑別も可能となった。

52. 甲状腺腫瘍のシンチグラムと CT との比較検討

熊野 町子 石田 修 浜田 辰己
田村 健治 宇野 保 (近大・放)
梶田 明義 (成・放)

病理組織診断の確定した甲状腺腫瘍54例のシンチグラムと CT を比較し, 両検査法の有用性, 診断的特徴につき検討した。